

博士課程

2020

授業科目〈シラバス〉

沖縄県立芸術大学大学院
芸術文化学研究科

授業科目〈シラバス〉について

この「2020 授業科目〈シラバス〉」は、令和2年度に大学院芸術文化科学研究科で開講される（一部休講科目を含む。）授業科目について、各担当教員から提出された授業科目〈シラバス〉をまとめたものです。履修計画や年間の学習計画を立てる際に利用してください。

なお、履修案内については、別冊「履修便覧」に記載しています。

1. 集中講義科目については、単位数・学期欄の（）内に表記されています。
2. 担当教員名欄には、科目の指導担当教員全員の氏名が記載されています。
3. 担当教員名欄の（客）は客員教授を、（非）は非常勤講師を表します。
4. 履修上の留意点には、履修の条件や注意事項のほかに、履修にあたり心掛けるべき点、学生への要望等が記載されています。

大学院芸術文化学研究科開設授業科目一覧表

科目コード	科目名	単位	学期	履修年次	授業区分	ページ
90112	芸術表現総合比較研究Ⅰ	2	通年	1・2	演習	1
90113	芸術表現総合比較研究Ⅱ	2	通年	2・3	演習	2
90228	比較美学研究A	2	後期	1・2	講義	3
90229	比較美学研究B	2	前期(集中講義)	1・2	講義	4
90230	比較芸術学特殊研究A	2	前期	1・2	講義	5
90231	比較芸術学特殊研究B	2	後期(集中講義)	1・2	講義	6
90242	日本芸術批評史研究A	2	前期	1・2	講義	7
90243	日本芸術批評史研究B	2	後期(集中講義)	1・2	講義	8
90244	東洋芸術批評史研究A	2	前期	1・2	講義	9
90245	東洋芸術批評史研究B	2	前期(集中講義)	1・2	講義	10
90234	西洋芸術批評史研究A	2	後期	1・2	講義	11
90235	西洋芸術批評史研究B	2	前期(集中講義)	1・2	講義	12
90216	民族工芸論研究	4	通年	1・2	講義	13
90217	映像論研究	2	前期(集中講義)	1・2	講義	14
90246	日本芸術文化学研究A	2	前期	1・2	講義	15
90247	日本芸術文化学研究B	2	後期	1・2	講義	16
90248	民族芸術文化学研究A	2	前期	1・2	講義	17
90249	民族芸術文化学研究B	2	後期	1・2	講義	18
90251	東洋芸術文化学研究A	2	前期	1・2	講義	19
90252	東洋芸術文化学研究B	2	後期	1・2	講義	20
90250	民族芸術学特論	2	後期(集中講義)	1・2	講義	21
90253	比較民俗学研究A	2	前期	1・2	講義	22
90254	比較民俗学研究B	2	後期	1・2	講義	24
90238	東洋工芸史研究	4	通年	1・2	講義	26
90220	西洋音楽史研究	4	通年	1・2	講義	27
90221	日本音楽史研究	4	通年	1・2	講義	28
90223	民族音楽学研究	4	通年	1・2	講義	29
90224	琉球音楽論研究	4	通年	1・2	講義	30
90225	民族舞踊学研究	4	通年	1・2	講義	31
90226	民俗芸能論研究	4	通年	1・2	講義	32
90227	琉球楽劇論研究	4	通年	1・2	講義	33
90239	楽曲分析研究	2	後期	1・2	講義	34
90240	アートマネジメント研究	2	通年	1・2	演習	35
90241	芸術学研究	2	通年	1・2	講義	36

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90112	芸術表現総合比較研究 I	2 単位 通年	1・2	演習	芸術文化学研究所 各指導教員 又は担当教員

■テーマ

芸術理論と実技の統合

■授業の概要

実技と理論の総合を目指すことを目的として設けられた科目である。芸術の題材、表現方式等について、創作・演奏・演出等の実際に則して総合比較研究を行い、芸術表現の本質と各ジャンルの特性を明らかにすることを目標とする。

博士論文作成をめざす学生は、自己の研究課題に関連する実技について指導を受けるとともに、専門分野の異なる研究者の指導・助言を受けることを通して、共同研究を行う。研究作品・研究演奏と博士論文の作成をめざす学生は、自己の研究課題やそれに関連する分野の学術研究について、他の教員の指導を受けると通して、共同研究を行う。いずれの場合も、具体的な内容は指導教員がコーディネートするので、指導教員とよく相談して計画を立てること。

学生の研究課題によっては、芸術文化学研究所担当教員以外の教員（非常勤講師を含む）の指導を受けることも可能である。

■到達目標

- ・ 自己の研究課題を充実させることのできる学習成果、研究成果をあげること。

■授業計画・方法

学生の研究テーマに沿って決定される授業、担当の教員または非常勤講師と、学生の指導教員または担当教員との共同により演習を進める。定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・ 学生の主体的な研究が求められる。

■成績評価の方法・基準

□方法

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

コーディネートする指導教員が、指導に関与した各教員と協議の上、平常の当該研究への取り組みについて（50%）、またはレポート等の成果をふまえ（50%）、総合的に評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

□テキスト

□参考文献

特になし

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90113	芸術表現総合比較研究Ⅱ	2単位 通年	2・3	演習	芸術文化学研究所 各指導教員 又は担当教員

■テーマ

芸術理論と実技の統合

■授業の概要

芸術表現総合比較研究Ⅰをすでに履修している学生を対象とする。

実技と理論の総合を目指すことを目的として設けられた科目である。芸術の題材、表現方式等について、創作・演奏・演出等の実際に則して総合比較研究を行い、芸術表現の本質と各ジャンルの特性を明らかにすることを目標とする。

博士論文作成をめざす学生は、自己の研究課題に関連する実技について指導を受けるとともに、専門分野の異なる研究者の指導・助言を受けることを通して、共同研究を行う。研究作品・研究演奏と博士論文の作成をめざす学生は、自己の研究課題やそれに関連する分野の学術研究について、他の教員の指導を受けることを通して、共同研究を行う。いずれの場合も、具体的な内容は指導教員がコーディネートするので、指導教員とよく相談して計画を立てること。

学生の研究課題によっては、芸術文化学研究所担当教員以外の教員（非常勤講師を含む）の指導を受けることも可能である。

■到達目標

- ・自己の研究課題を充実させることのできる学習成果、研究成果をあげること。

■授業計画・方法

学生の研究テーマに沿って決定される実技担当教員または非常勤講師と、学生の指導教員または担当教員との共同により演習を進める。定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・学生の主体的な研究が求められる。

■成績評価の方法・基準

□方法

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

コーディネートする指導教員が、指導に関与した各教員と協議の上、平常の当該研究への取り組みについて（50%）、またはレポート等の成果をふまえ（50%）、総合的に評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

□テキスト

□参考文献

特になし

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90228	比較美学研究A (奇数年度開講)	2単位 後期	1・2	講義	喜屋武 盛也

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90229	比較美学研究B (奇数年度開講)	2単位 前期 (集中)	1・2	講義	関村 誠 (非)

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90230	比較芸術学特殊研究A (偶数年度開講)	2単位 前期	1・2	講義	土屋誠一

■テーマ 作品およびテキストの深い読解

■授業の概要

第2次大戦後以降の現代美術の理論について、作品およびそれに関するテキストの読解をし、他の表現領域(写真、映画 etc.) や、表象をめぐる政治学との比較考察を目的とする。

■到達目標

作品やテキストの読解力を身につけること。

■授業計画・方法

下記はあくまで目安であり、受講者の関心や必要性に応じて、授業内容は検討する。研究や実制作に役立つ理論的ツールを提供することを主眼とするためである。

第1回 インTRODクシヨン

第2回 現代美術(基礎編)

第3回 現代美術(作品分析編)

第4回 現代美術(テキスト読解編)

第5回 現代美術(総合的分析編)

第6回 映像芸術(基礎編)

第7回 映像芸術(作品分析編)

第8回 映像芸術(テキスト読解編)

第9回 映像芸術(総合的分析編)

第10回 現代建築(基礎編)

第11回 現代建築(作品分析編)

第12回 現代建築(テキスト読解編)

第13回 現代建築(総合的分析編)

第14回 その他、現代の諸芸術

第15回 総括

※定期試験は実施しない。

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

・漫然と講義を聴くだけでなく、履修者の主体的かつ積極的な授業参加が求められる。

■成績評価の方法・基準

【方法】受講態度(100%)

【基準】予習復習含め、授業内容の理解度で成績を判定するので、受講態度で判断する。

芸術文化学研究科(博士課程)の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献(資料)等

教科書 特になし

テキスト 講義の過程で適宜紹介する

参考文献 講義の過程で適宜紹介する

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90231	比較芸術学特殊研究B (偶数年度開講)	2単位 後期 (集中)	1・2	講義	樫木 野衣 (非)

■テーマ 芸術の臨界点

■授業の概要

20世紀の諸芸術が残した成果を前提に、21世紀の芸術のあり方について広く考察する。
文化芸術を取り巻く情勢を勘案して内容を一部変更する可能性あり。

■到達目標

- ・21世紀に入り大きく変容しつつある芸術の状況に適応できる柔軟な思考能力を、従来の専門性にとらわれず柔軟に養う。

■授業計画・方法

映像や図画資料を活用してできるだけ具体的に考える材料を提供する。

- 1 はじめに
- 2 戦争と美術 (基礎編)
- 3 戦争と美術 (分析)
- 4 戦争と美術 (読解)
- 5 戦争と美術 (総括)
- 6 震災と美術 (基礎編)
- 7 震災と美術 (分析)
- 8 震災と美術 (読解)
- 9 震災と美術 (総括)
- 10 五輪と美術 (基礎編)
- 11 五輪と美術 (分析)
- 12 五輪と美術 (読解)
- 13 五輪と美術 (総括)
- 14 今後の展望
- 15 試験 (レポートの執筆) と講義のまとめ

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

- ・本講義は上記に示した通り大きく分けて三つのテーマを持っている。
講義に臨むにあたっては事前に各自が関連すると考える書籍を読んで関心を高めておくこと。

■成績評価の方法・基準

□方法 レポート (50%)、平常点 (40%)、講義に取り組む姿勢 (10%)

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化学研究科 (博士課程) の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献 (資料) 等

□教科書 特定の教科書は使用しない。

□参考文献 講義の中で随時示す。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90242	日本芸術批評史研究A (奇数年度開講)	2単位 前期	1・2	講義	小林 純子

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90243 (90232)	日本芸術批評史研究B (奇数年度開講)	2単位 後期 (集中)	1・2	講義	未定

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90244 (90233)	東洋芸術批評史研究A (奇数年度開講)	2単位 前期	1・2	講義	金 恵信

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90245	東洋芸術批評史研究B (偶数年度開講)	2単位 前期 (集中)	1・2	講義	後小路 雅弘 (非)

■テーマ 東南アジア近代美術史—「美術」の誕生から今日の表現まで

■授業の概要

東南アジアにおける「美術」制度の誕生と今日に至る展開について、基本的な問題を理解するとともに、主要な作品と作家について学ぶ。

■到達目標

- ・東南アジアを中心にアジアの近代美術史における基本的な問題を理解し、主要な作家と作品について説明できるようになること。
- ・東南アジアを中心にアジアの今日の美術の基本的な問題を理解し、主要な作家と作品について説明できるようになること。
- ・日本と東南アジアとの関係を理解し、それがどのように美術の発展と関わったかについて論理的に記述できるようになること。

■授業計画・方法

1. 「アジア」をめぐる基本的な問題
2. アジアの「美術」をめぐる基本的な問題
3. フィリピンにおける「美術」の誕生
4. インドネシアにおける「美術」の誕生
5. シンガポール・マレーシアにおける「美術」の誕生
6. タイにおける「美術」の誕生
7. ベトナムにおける「美術」の誕生
8. 日本の戦争とアジアの美術 1
9. 日本の戦争とアジアの美術 2
10. 独立前後の東南アジアの美術
11. 東南アジアにおける抽象表現とポスト抽象
12. 東南アジアの現代美術 1980年～2000年の作家と作品
13. 東南アジアの現代美術 2000年以降の作家と作品
14. 東南アジア近現代美術史をめぐる状況の変化
15. 日本はどのようにアジアの美術を紹介してきたのか

※定期試験は実施しない。(レポートを課す)

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

- ・「アジア」に対する自らの先入観をできる限り払拭して授業に臨むこと。
- ・参考文献にひととおり目を通して授業に臨むこと。
- ・授業の中から、自分なりの関心のあるテーマについて考え、授業の後、自分なりに調べること。

■成績評価の方法・基準

- 方法 授業への積極的な参加/発言など平素の授業の成績 (50%) にレポート (50%) の成績を加え、総合的に判断する。
- 基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究所 (博士課程) の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献 (資料) 等

□教科書 なし

□テキスト その都度配布する

□参考文献

- 『東南アジア—近代美術の誕生』(展覧会図録) 福岡市美術館 1997年
『アジアの美術—福岡アジア美術館のコレクションとその活動』美術出版社 2002年 (改訂増補版)
『アジアコレクション100』福岡市文化芸術振興財団 2016年
『アジアをつなぐ—境界を生きる女たち 1984-2012』(展覧会図録) 沖縄県立美術館ほか 2012年
『サンシャワー:東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで』(展覧会図録) 国立新美術館/森美術館 2017年

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90234	西洋芸術批評史研究A (偶数年度開講)	2単位 後期	1・2	講義	尾形 希和子

■**テーマ** 動物図像についての考察を通して図像解釈学の方法に触れる。

■**授業の概要**

イタリア・ロマネスク美術の『動物誌』

ロマネスクの聖堂の内外には、聖書のエピソードやキリスト教の教義に基づく図像に混じって多くの世俗的図像が施され、聖と俗が分かちがたく渾然一体となっている。植物や動物、怪物などの図像は概して「単なる装飾」とみ込まれてきた。しかし中でも「動物」の図像は、呪術的世界の残滓であると同時に、古代の著述や『フィシオログス』のような動物寓意譚に依拠するキリスト教的な象徴、寓意としても用いられている。本授業では、主にイタリアのロマネスク聖堂に描かれた動物たちの図像の役割と意味を、時に日本や西洋以外の文化と比較しつつ考察していきたい。

受講生は動物に関するテーマを選び、研究発表を行う。

■**到達目標**

- ・図像解釈研究の方法について理解し、その方法を自身の研究や制作の中で利用できるようにする。

■**授業計画・方法**

- 1) ロマネスクの時空について
 - 2) 『フィシオログス』『動物誌』について
 - 3) 図像解釈研究の方法について
 - 4) 動物と人間の境界について (アガンベン、デリダ)
 - 5) 「時」の表象と動物
 - 6) オケアノスの図像について (地中海の豊穡)
 - 7) セイレーン、トリトーン、スキュラについて
 - 8) 魚、イルカについて
 - 9) ワニとヒュドラについて
 - 10) ドラゴン・蛇、蝮について
 - 11) 鯨、レヴィアタン、ケートスについて
 - 12) マングースとコブラ、カワウソについて
 - 13) 研究発表
 - 14) 研究発表
 - 15) 総括
- ※ 定期試験は行わない

■**履修上の留意点** (授業以外の学習方法を含む)

- ・授業内で研究発表を行い、その内容をレポートに纏めて期末に提出する。

■**成績評価の方法・基準**

- 方法** 授業内での発表(30%)、期末レポート(40%)、通常の授業に積極的に参加しているか(30%)を総合的に評価する。
- 基準** 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。芸術文化学研究所(博士課程)の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■**教科書・参考文献(資料)等**

□**参考文献**

尾形希和子『教会の怪物たち』講談社、2013年
その他の参考文献は授業の中で紹介する。随時プリントを配付する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90235	西洋芸術批評史研究B (偶数年度開講)	2単位 前期 (集中)	1・2	講義	小池 寿子(非)

■**テーマ** 死生学の批評史研究の一環としてキリスト教の死生観を手繰る。

■**授業の概要**

ヨーロッパのキリスト教中世における死生観を、芸術を通じて読み解いてゆく。

■**到達目標**

- ・キリスト教における死生観について理解を深める。
- ・キリスト教における終末観を学ぶ。
- ・キリスト教における来世観を学ぶ。
- ・宗教における死生観・終末観・来世観の相違について考察する。

■**授業計画・方法**

1. キリスト教中世における死生観とは
2. 創世記から終末まで—キリスト教的歴史観
3. 最後の審判と煉獄
4. 黙示録（1）中世初期から紀元千年まで
5. 黙示録（2）ロマネスクから16世紀まで
6. 死のテーマ：「三人の死者と三人の生者」「死の舞踏」「死の勝利」「墓碑彫刻」
7. 「三人の死者と三人の生者」：北方とイタリア
8. 「三人の死者と三人の生者」と「最後の審判」：フランス壁画を例に
9. 「三人の死者と三人の生者」と「死の勝利」：イタリア壁画を例に
10. 「死の勝利」の展開
11. 「死の舞踏」の成立
12. 「死の舞踏」の展開
13. 「死の舞踏」から万人の死へ
14. 「往生術」
15. 総括

※定期試験は実施しない。レポート提出

■**履修上の留意点**（授業以外の学習方法を含む）

本講義ではキリスト教における死生観を考察するが、各自の死生観・宗教観について、また今日における死生観について考えながら受講して欲しい。

■**成績評価の方法・基準**

□**方法** 授業への取組。レポート評価。

□**基準** 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

基本的事項を習得するとともに、つねに本テーマについて考察しながら、自身の意見を明確にする。

芸術文化学研究所（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■**教科書・参考文献（資料）等**

□**教科書** なし

□**テキスト** 小池寿子『死を見つめる美術史』ちくま学芸文庫2006年。

同 『内臓の発見—西洋美術における身体とイメージ』筑摩選書 2011年

□**参考文献** 授業時に適宜指示する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90216	民族工芸論研究 (偶数年度開講)	4単位 通年	1・2	講義	柳 悦州 (客)

■テーマ 織物文化を軸として民族工芸について考察する。

■授業概要

織物は、人びとの生活と密接に関わってきた。この授業では、沖縄とラオスやシルクロード沿い諸国の織機構造や織物技術について、歴史の変遷や文化的背景を視野に入れながら検討し、工芸と織物の意義について明らかにする。

■到達目標

工芸は、伝統として固定されたものではなく、ダイナミックに様々な要因で速い速度で変化していく部分と、変化の遅い部分のあることを把握し、民族工芸の特質について理解する。

■授業計画・方法

前期

1. 織物と織機の定義
2. 経糸の整経方式
3. イランの遊牧民の織物
4. ペルシャカーペット
5. ウイグル人の経緋絹織物
6. ウイグル人の木綿織物
7. トルコの織物
8. シルクロード沿い諸国のムシロとその織機
9. チベットの綾織り織物
10. 中央アジア地域の織機の変化と生活様式
11. 中南米の特殊な織物
12. ラオスの浮き織物と織機
13. ラオスの少数民族の腰機
14. ラオスのムシロとその織機
15. 前期のまとめ

後期

16. ラオスの織物素材
17. 西洋の産業革命と織物
18. 日本の産業革命と織物産業の変化
19. 日本の腰機
20. 日本の高機
21. 石川メンサーの意義
22. 奄美の紋織物と腰機
23. 沖縄の紋織物と腰機
24. 沖縄の紋織物と腰機
25. 沖縄の織物素材
26. 沖縄の緋 (手結緋)
27. 沖縄の緋 (捺染、機締め、絵図緋)
28. 沖縄の近代の織物
29. 戦後の沖縄の織物
30. まとめ

前期は、伝統織物と生活様式の変化の関係について民族工芸の視点から考察する。後期は織物文化の諸相から染織技術とその変遷について考察するとともに、沖縄の工芸の特性について明らかにしていく。

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

織物と織物技術に関する基礎知識が必要である。

■成績評価の方法

□方法 平常点とレポートによる総合評価

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化学研究所 (博士課程) の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献 (作品) 等

□参考文献 吉本忍「手織機の構造・機能的分析と分類」国立民族学博物館研究報告 12 巻 2 号 (1987)

吉本忍・柳悦州『世界の織機と織物』国立民族学博物館 (2013)

田中俊雄・玲子『沖縄織物の研究』紫紅社 (1976)

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90217	映像論研究 (偶数年度開講)	2単位 前期 (集中)	1・2	講義	野村康治(非) 仲本 賢

■テーマ 映像に対する客観的視点を養う

■授業の概要

映像はときに視覚以外の感覚情報を含むが、やはり視覚情報を抜きに語ることでできない表現である。従って、視覚に関する理解は映像作品、映像メディアの理解にも欠かせないものといえよう。そこで本授業では、まず科学的知見に基づいて視覚メカニズムを説明し、人間がいかにか「映像を視る」のかについて述べる。そして、人間がいかにか映像作品の内容をとらえ、理解していくのかという映像認識に関する問題を取り上げる。参考映像視聴を多用しながら、人間と映像との関わりを科学的な観点に立ち、多面的に解説し、映像とは何かを考察していきたい。人間の視る機能や認知のメカニズムを理解した上で、映像による情報伝達、人間と映像とのかかわりについて思索し、理解してほしい。

■到達目標

- ・映像を認識するメカニズムに関して学術的知識を習得する。
- ・映像作品に対する客観的論考ができるようになる。
- ・映像と人間との関わりが理解できるようになる。

■授業計画・方法

1. 映像とは（映像を視るということ）
2. 視覚の生理学的基礎
3. 色覚と色の印象
4. 視覚表現と人間の知覚特性
5. 空間知覚と映像における空間表現とその印象
6. 運動知覚と映像における動き表現とその印象
7. 美と感性
8. 映像情報の心的処理
9. 映像操作がもたらす心理的効果
10. 映像編集がもたらす心理的効果
11. 映像と人間発達との関連1（乳児期～青年期）
12. 映像と人間発達との関連2（青年期以降）
13. 映像が人体に及ぼす影響
14. 映像と心の病理
15. 授業のまとめ及びレポート提出（全行程の振り返りを行う）

定期試験・・・定期試験は実施しない。

※芸術文化科学研究科（博士課程）の学生には、上記日程以外に別の日程で映像論に関する文書、書籍の講読を課題として与え、これらに関する解析と論考を行なうレポートを課す。また発表会を設け討論を行なう。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

・授業では参考映像を提示するが、授業時間内に提示できない映像資料もある。授業で紹介した参考文献、参考映像資料について授業時間外に図書室等で検索、視聴することが望ましい。なお、レポートを課すので、調査、検討し期限内に提出すること。

■成績評価の方法・基準

□方法 ・平常点25%・コメントペーパー25%・レポート50%で総合的に評価する。
・レポートは2課題とする。

□基準 ・到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。平常点は授業時の発言など授業参加の積極性などによって評価する。また提出されたコメントペーパーやレポートによりその理解度を評価する。
なお、芸術文化科学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□参考文献 『見てわかる視覚心理学』2014/4 大山 正（著）、鷲見 成正（著）

『映像の心理学—マルチメディアの基礎（新心理学ライブラリ（S1））』1996/6/ 中島 義明（著）

『映像心理学の理論』2011/11 中島 義明（著）

『アニメーションの心理学』2019/9 横田 正夫（編）

この他、必要に応じて授業時に指示する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90246 (90218)	日本芸術文化学研究A (民族芸術文化学研究A)	2単位 前期 (4単位 通年)	1・2	講義	波平 八郎

※平成 27 年度以降の入学生：「日本芸術文化学研究 A」を登録すること。

※平成 26 年度以前の入学生：「民族芸術文化学研究 A」を登録すること。同一年度内に「日本芸術文化学研究 A」（2 単位）、「日本芸術文化学研究 B」（2 単位）の両方を履修して「民族芸術文化学研究 A」（4 単位）に読み替える。

■テーマ 日本文学作品（『南方録 覚書』）の講読

■授業の概要

千利休が確立した茶の作法を伝えるとされる『南方録 覚書』を講読する。その際、茶の湯の理論を様々な芸術分野に適用できないか試みる。たとえば、茶の湯の「わび」という理念を文学や美術工芸の分野に適用できるかどうか試みる。（受講生の興味・関心に応じて講読作品を変更することがある。）

■到達目標

茶の湯の理念を通して、日本文学、その他の分野の芸術理念を理解する。

■授業計画・方法

『南方録 覚書』を逐条講読する。受講生は当該作品について授業中に自身の意見を発表する。また、受講生は分担してテキストを輪読する。

なお、講読するテキストについては、受講生の専門分野を勘案して、受講生と協議の上変更することがある。テキストが『南方録 覚書』の場合、次のような流れで授業を進めていく。

[前学期]	
1	オリエンテーション
2	茶の湯の心
3	手水鉢
4	利休の師匠
5	かなうはよし、かないたがるはあしし
6	露地に水を打つ
7	雪駄
8	わび茶の花は軽く生ける
9	禁花の歌
10	夜会にも白い花
11	夏は涼しく、冬は暖かに
12	暁の火相
13	暁に汲んだ水
14	暁会と夜会
15	前期まとめ・レポート提出

（定期試験は実施しない）

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

レポートは、それぞれ関心のあるテーマをテキストから選んでレポートする。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点（50%）、レポート（50%）を総合的に判断する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（作品）等

□教科書 なし

□テキスト 筒井紘一訳注『利休聞き書き「南方録 覚書」』（講談社学術文庫）

□参考文献 時代別日本文学史事典編集委員会『時代別日本文学史事典 近世編』（東京堂出版）・その他適宜指示する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90247 (90218)	日本芸術文化学研究B (民族芸術文化学研究A)	2単位 後期 (4単位 通年)	1・2	講義	波平 八郎

※平成 27 年度以降の入学生：「日本芸術文化学研究 B」を登録すること。

※平成 26 年度以前の入学生：「民族芸術文化学研究 A」を登録すること。同一年度内に「日本芸術文化学研究 A」（2 単位）、「日本芸術文化学研究 B」（2 単位）の両方を履修して「民族芸術文化学研究 A」（4 単位）に読み替える。

■テーマ 日本文学作品（『南方録 覚書』）の講読

■授業概要

千利休が確立した茶の作法を伝えるとされる『南方録 覚書』を講読する。その際、茶の湯の理論を様々な芸術分野に適用できないか試みる。たとえば、茶の湯の「わび」という理念を文学や美術工芸の分野に適用できるかどうか試みる。（受講生の興味・関心に応じて講読作品を変更することがある。）

■到達目標

茶の湯の理念を通して、日本文学、その他の分野の芸術理念を理解する。

■授業計画・方法

『南方録 覚書』を逐条講読する。受講生は当該作品について授業中に自身の意見を発表する。また、受講生は分担してテキストを輪読する。

なお、講読するテキストについては、受講生の専門分野を勘案して、受講生と協議の上変更することがある。

テキストが『南方録 覚書』の場合、次のような流れで授業を進めていく。

[後学期]	
1	後期オリエンテーション
2	雪の茶会の心得
3	雪の夜会の灯籠
4	茶室
5	不完全の美
6	名物の掛物
7	茶の湯における掛物
8	わび茶の料理
9	懐石の作法
10	茶壺の飾り方
11	捨壺
12	風炉
13	釣瓶水指
14	水指の用い方
15	まとめ・レポート提出

（定期試験は実施しない。）

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

レポートは、それぞれ関心のあるテーマをテキストから選んでレポートする。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点（50%）、レポート（50%）を総合的に判断する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（作品）等

□教科書 なし

□テキスト 筒井紘一訳注『利休聞き書き「南方録 覚書」』（講談社学術文庫）

□参考文献 時代別日本文学史事典編集委員会『時代別日本文学史事典 近世編』（東京堂出版）・その他適宜指示する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90248	民族芸術文化学研究A	2単位 前期	1・2	講義	鈴木 耕太

■テーマ 琉球文学作品の講読と解釈

■授業の概要

琉球文化を表現するものの中から琉球文学について解釈方法を基礎的に学習する。琉球・沖縄の芸術には琉球語が密接に関わり合っており、前近代に至っては近世琉球の文化や、琉球語（とくに組踊・琉歌語）の解釈が必要不可欠である。本講義では、琉球語の表現を知る手だてとして、おもろさうし・琉歌・組踊を中心とし、さらに南島歌謡など基礎的に学ぶ。特に作品の背景にある人々の感情や、詠まれた（創作された）世界を捉え、一首・または一作品ごとに琉球語の読解、解釈、鑑賞を検討していく。なお、講読するおもろさうし・琉歌・組踊・南島歌謡などのジャンルについては、受講生の専門分野を考慮し、受講生と協議の上決定する。

■到達目標

おもろさうし・琉歌・組踊・南島歌謡など一つの作品を正確に解釈できるようになることを目指す。古典琉球語について、用例にあたり、その語が当該作品でどのような意味を担っているかを明らかに出来るようにする。作品一首の解釈・鑑賞へといたる道筋についてその方法を習得し、一首の鑑賞が出来るようになることを最終目標とする。

■授業計画・方法

第1回 琉球文学概説	第10回 発表と鑑賞「おもろさうし」巻一～巻十二より
第2回 琉球文学史概説	第11回 発表と鑑賞「おもろさうし」
第3回 テキスト講読「おもろさうし」 巻一～巻十二を中心に	巻十三～巻二十二より
第4回 テキスト講読「おもろさうし」 巻十三～巻二十二を中心に	第12回 発表と鑑賞「琉歌百控」乾柔節流より
第5回 テキスト講読「琉歌百控」乾柔節流より	第13回 発表と鑑賞「琉歌百控」独節流より
第6回 テキスト講読「琉歌百控」独節流より	第14回 発表と鑑賞「琉歌百控」覧節流より
第7回 テキスト講読「琉歌百控」覧節流より	第15回 本講義のまとめ
第8回 テキスト講読「組踊」「執心鐘入」第一場	※定期試験は実施しない。レポートを課す。
第9回 テキスト講読「組踊」「執心鐘入」第二場	

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

履修にあたっては、事前に琉球文学の基礎知識、または基礎文献・辞典の活用方法（項目の引き方）などを予習しておくこと。たとえば『沖縄語事典』『沖縄古語大辞典』その他琉球語の辞典などである。また、先行研究として、池宮正治・玉城政美・波照間永吉などの著書をあらかじめ読んでおくことが望ましい。

■成績評価の方法・基準

- 方法 通常の授業発表（平常点50%）に加え、発表態度、発表レポート（50%）を元に評価を決定する。
- 基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

- 教科書 講義用レジュメや資料を配布する。
- テキスト なし。
- 参考文献

島袋盛敏・翁長俊郎『琉歌全集』（1968年・武蔵野書店）国立国語研究所『沖縄語辞典』（1963年・大蔵省印刷局）
 沖縄古語辞典編集委員会編『沖縄古語大辞典』（1995年・角川書店）玉城政美『南島歌謡論』（1991年・砂子屋書房）
 外間守善『南島文学論』（1994年・角川書店）波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』（1999年・砂子屋書房）

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90249	民族芸術文化学研究B	2単位 後期	1・2	講義	鈴木 耕太

■テーマ 琉球文学作品の講読と解釈

■授業の概要

琉球文化を表現するものの中から「琉球文学芸能論」について基礎的に学習する。前期に引き続き、詞章解釈を通じて、琉球語の表現やその特性を理解するために、琉歌・組踊を中心とした琉球芸能文学の作品から、作品の背景にある人々の感情や、詠まれた（創作された）世界を捉え、一首・または一作品ごとに琉球語の読解、解釈、鑑賞を検討していく。後期は前期に行った解釈に加え、琉球舞踊や組踊、または祭祀の場で歌われる作品についても言及し、文献だけでなく、観劇やフィールドワークなども加え、深化した発表を行うことを目的とする。

なお、講読するおもしろさうし・琉歌・組踊・南島歌謡などのジャンルについては、受講生の専門分野を考慮し、受講生と協議の上決定する。

■到達目標

おもしろさうし・琉歌・組踊・南島歌謡など一つの作品を正確に解釈できるようになることを目指す。古典琉球語について、用例にあたり、その語が当該作品でどのような意味を担っているかを明らかに出来るようにする。作品一首の解釈・鑑賞へといたる道筋についてその方法を習得し、一首の鑑賞が出来るようになることを最終目標とする。

■授業計画・方法

第1回 琉球文学芸能論概説

第2回 琉球芸能史概説

第3回 作品鑑賞「琉球古典舞踊」（女踊・老人踊）

第4回 作品鑑賞「琉球古典舞踊」（二才踊・若衆踊）

第5回 作品鑑賞「組踊」朝薫五番より

第6回 作品鑑賞「組踊」「大川敵討」前半

第7回 作品鑑賞「組踊」「大川敵討」後半

第8回 テキスト講読「組踊」「大川敵討」前半

第9回 テキスト講読「組踊」「大川敵討」後半

第10回 発表と鑑賞「琉球古典舞踊」（女踊）より

第11回 発表と鑑賞「琉球古典舞踊」

（二才踊・若衆踊）より

第12回 発表と鑑賞「組踊」朝薫五番より

第13回 フィールドワーク（朝薫誕生の地、首里儀保・末吉宮）

第14回 フィールドワーク（万寿寺・浦添中頭方西街道、玉城朝薫の墓）

第15回 本講義のまとめ

※定期試験は実施しない。レポートを課す。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

履修にあたっては、「民俗芸術文化学研究A」のシラバスで提示した内容に加え、琉球舞踊・組踊・年中行事などの祭祀を実際に見聞することがのぞましい。毎回の講義に向けて、事前準備を欠かさないこと。

■成績評価の方法・基準

□方法 通常の授業発表（平常点50%）に加え、発表態度、発表レポート（50%）を元に評価を決定する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 講義用レジюмеや資料を配布する。

□テキスト なし。

□参考文献

「民俗芸術文化学研究A」の参考文献の他に、池宮正治『琉球文学芸能論』、矢野輝雄『組踊への招待』『組踊を聴く』などを参考文献とする。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90251	東洋芸術文化学研究A	2単位 前期	1・2	講義	森 達也

■テーマ 東洋工芸史の探求

■授業の概要

世界の陶磁器の源流となった中国陶磁の発展史を、時代ごとに詳説する。その背景となった中国を中心としたアジアの歴史についても概説。また、中国陶磁と関係の深い青銅器、漆器、ガラス器、玉器、金銀器など中国工芸全般についても触れる。文献や写真だけでなく、陶片などの実物資料も活用する。

■到達目標

- ・中国陶磁の発展史の詳細を把握するとともに、中国工芸全般への理解を深めることを目的とする。
- ・中国陶磁史を通じてアジア工芸史全般を理解することにより、東洋美術史を理解するための基礎を身に着ける。
- ・実物資料を見る機会を設け、研究者として資料調査方法を身に着けることも目標とする。

■授業計画・方法

1. オリエンテーション、中国の風土と歴史
 2. 中国陶磁史概説
 3. 新石器時代の土器
 4. 商周時代の土器と原始青磁
 5. 秦・兵馬俑と漢・兵馬俑
 6. 漢時代陶磁の発展
 7. 魏晋南北朝の陶磁
 8. 北朝から唐時代の鉛釉陶器の発展と白磁の誕生
 9. 晩唐の中国陶磁と海外輸出
 10. 青磁の発展－越州窯、耀州窯、汝窯－
 11. 青磁の発展－南宋官窯、龍泉窯－
 12. 白磁の発展－邢窯、定窯、景德鎮窯、徳化窯－
 13. 青花磁器の誕生と発展(景德鎮)
 14. 青花磁器と五彩磁器の展開(景德鎮)
 15. 中国貿易陶磁、授業総括
- ※ 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

中国史の概説書や中国陶磁史の概説書に目を通してもらいたい

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点40%、レポート60%で評価を行う。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化学研究科(博士課程)の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献(資料)等

□教科書 なし

□テキスト 資料は講義中にプリントを配布する。

□参考文献 講義中に紹介する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90252	東洋芸術文化学研究B	2単位 後期	1・2	講義	森 達也

■テーマ 東洋工芸史の探求

■授業の概要

アジア各地の陶磁器の発展史を、地域ごと、時代ごとに詳説する。その背景となったアジアの歴史についても概説。また、陶磁器と関係の深い青銅器、漆器、ガラス器、玉器、金銀器など工芸全般についても触れる。文献や写真だけでなく、陶片などの実物資料も活用する。

■到達目標

- ・日本を始めとしたアジア各地（中国を除く）の陶磁の発展史の詳細を把握するとともに、工芸全般への理解を深めることを目的とする。
- ・陶磁史を通じてアジア工芸史全般を理解することにより、東洋美術史を理解するための基礎を身に着ける。
- ・実物資料を見る機会を設け、研究者として資料調査方法を身に着けることも目標とする。

■授業計画・方法

1. オリエンテーション、アジアの風土と歴史
2. 日本 原始・古代
3. 日本 中世(前期)
4. 日本 中世(中期)
5. 日本 中世(後期)
6. 日本 桃山
7. 日本 近世
8. 日本 近・現代
9. 日本 琉球陶磁
10. 韓国 原始・古代
11. 韓国 高麗時代
12. 韓国 朝鮮時代
13. 東南アジア
14. 西アジア
15. ヨーロッパ、授業総括

※ 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

東洋史・日本史・西アジア史の概説書や陶磁史の概説書に目を通してもらいたい。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点40%、レポート60%で評価を行う。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化学研究所（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 なし

□テキスト 資料は講義中にプリントを配布する。

□参考文献 講義中に紹介する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90250	民族芸術学特論	2単位 後期 (集中)	1・2	講義	石岡 良治 (非)

■テーマ 芸術からポピュラー文化に至る「イメージ制作」と人類の関わりを捉える

■授業の概要

民族学・人類学的知見の蓄積により、人類の文化的営みにおいて「イメージ」が果たす役割の重要性が広く知られるようになっている。造形芸術がイメージ制作 (image making) の観点から捉え直され、主としてヨーロッパや東アジアなどを対象とした「美術史」についても新たな光が投げかけられている。前近代における「民衆芸術」への関心や、近現代におけるポピュラー文化への関心などが、芸術学における重要な問いを構成するようになったのも、こうした文脈から理解することができるだろう。本講義はそうした状況を捉えるために、現代の様々な理論を概観した上で、民族学・人類学的観点から諸星大二郎や岩明均などのマンガ作品、高畑勲や宮崎駿のアニメ作品などを読解する。そのさい、「キッチュ」「マンガ」「絵馬」といった多様な対象に取り組んだ日本の美術批評家、石子順造の活動を手がかりにしつつ、彼が最晩年に「丸石神」への関心に至った歩みを批評的に再検証する。芸術的創造の問いを身近な場面で考えていきたい。

■到達目標

民族誌・人類学やポピュラー文化などを通じた「イメージ」の役割の広がりについて学び、人類と「芸術」の関わりについて各自の関心と結びつけて理解を深める。

■授業計画・方法

1. イントロダクション：イメージと人類
2. ドイツ・オーストリア芸術学の現代的意義：ウィルヘルム・ヴォリンガー
3. ドイツ・オーストリア芸術学の現代的意義：エルンスト・ゴンブリッチ
4. ジル・ドゥルーズの芸術学と現在のイメージ人類学
5. 「オブジェクト」への思弁的関心とデザイン
6. 諸星大二郎と人類学的関心 (1) 漢字文化圏を掘り下げる
7. 諸星大二郎と人類学的関心 (2) 『マッドメン』と神話の構造分析
8. 人類の暴力と投擲：『寄生獣』とは誰か
9. ジブリアニメと「日本」：『もののけ姫』(宮崎駿)と『鳥獣戯画』起源説(高畑勲)の限界を考える
10. 民衆芸術と消費文化
11. 現代日本の創作における人類学的想像力：上橋菜穂子と都留泰作
12. 装飾をめぐる：造形の「エッジ」と「テリトリー」
13. 石子順造の仕事：先史性、キッチュ、マンガ
14. 創造行為とイメージの分析
15. まとめ：文化の無底性に向き合うこと
定期試験は実施しない。

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

以下に挙げる「参考文献 (作品)」のいくつかに予め触れておくことが望ましい。その上で講義をふまえ、レポート課題に取り組んでほしい。

■成績評価の方法・基準

- 方法 平常点+コメントペーパー40%、レポート60%
- 基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究科 (博士課程) の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献 (資料) 等

- 教科書 なし、ただし参考文献・作品のいずれかに触れておくこと
- 参考文献 石岡良治『超』批評 視覚文化×マンガ』青土社、『現代アニメ「超」講義』PLANETS
ウィルヘルム・ヴォリンガー (中野勇訳)『ゴシック美術形式論』文春学藝ライブラリーの石岡良治による解題
石子順造『キッチュ/マンガ』小学館クリエイティブ
諸星大二郎『妖怪ハンター』『暗黒神話』『マッドメン』
岩明均『寄生獣』『七夕の国』『ヒストリエ』
都留泰作『ナチュン』『ムシヌユン』
上橋菜穂子『精霊の守り人』
宮崎駿『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』
高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』『十二世紀のアニメーション』

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90253	比較民俗学研究A	2単位 前期	1・2	講義	吉川 秀樹 (非)

■テーマ 人類学の視点からの art や performing art の研究

■授業の概要

Anthropology、Art、そして Performing Art の特別な関係 Part I

伝統的に非西洋の文化を研究してきた人類学ではあるが、非西洋の「art」や「performing art」は、研究の対象として、また新たな理論、研究方法（研究成果の提示法も含めて）を生み出すインスピレーションとして常に特別な存在であり続けてきた。例えば審美性 (aesthetics)、感情 (emotions)、感受性 (sensitivity)、創造性 (creativity) という異文化研究において方法論上扱いにくい領域に人類学を踏み込ませた。また多くの非西洋文化／社会において精神構造やコスモロジーや社会構造と密接な関係にある art や performing art が、colonization や globalization を通して、西洋の文化／社会に移行することにより、どのような新たな意味や価値等が与えられるか、すなわち異文化／社会間の appropriation の分析に人類学を向かわせた。さらには、人類学における logocentric (文字中心) な研究成果の提示法にも疑問を投げかけ、映像人類学 (visual anthropology) 等の分野の確立へと繋がっていった。そして人類学における art や performing art の研究は、西洋文化／社会の art や performing art の再検証にも影響を与えている。

この授業では、art や performing art を人類学的視点から研究／分析した英語の論文を読み、様々な文化／社会における art や performing art について、そして art や performing art と人類学の関係について考察していく。同時に、大学院レベルで英語の論文を講読するに必要な英語力やスキルを習得していく。

■到達目標

- ・異文化／社会における art や performing art (と分類されるもの) の存在に注目し、その多様性、ならびに共通点や相違点を理解する。
- ・Art や performing art の人類学的研究の視点、理論、方法について学び、art や performing art と人類学の関係について考察する。
- ・研究における英語の論文の講読に必要な英語力やスキルを習得し、向上させる。
- ・学生が各自持つ art や performing art に対するアプローチ／専門性の特徴を、人類学のアプローチとの比較を通して、理解する

■授業計画・方法

授業は、講読する論文についてのクラス・ディスカッションを中心に行われる。学生はディスカッションのための「レジュメ」の準備をすること。また各論文を読み始めるにあたり、パワーポイントや資料を使って文化／社会的背景の説明が教員により行われる。

1. オリエンテーション: Anthropology と Art と Performing Art の特別な関係
プリミティビズム(primitivism) と 普遍性 (the universal)
2. 第2週 “Primitive Art” by Franz Boas (1955) in AA, “Split Representation in the Art of Asia and America” by Claude Levi-Strauss (1963) in AA, “Singing the Rug: Patterned Textiles and the Origins of Indo-European Metrical Poetry” by Anthony Tuck (2006) in AP.
3. 同上
4. 同上
5. 同上
6. 同上
7. 機能 (functions)、意味 (meaning)、社会／文化的背景 (socio-cultural context)
Sacred Art and Spiritual Power: An Analysis of Tlingit Shamans’ Masks” by Aldona Jonaitis (1982) in AA, “Modernity and the ‘Graphicalization of Meaning New Guinea Highland Shield Design in Historical Perspective” by Michael O’ Hanlon (1995) in AA, or “Performance and the cultural Construction of Reality” by Edward Schieffelin (1985) in AP.
8. 同上

9. 同上

10. 同上

11. 異文化と審美性 (aesthetics)

“Yoruba Artistic Criticism” by Robert Farris Thompson (1973) in AA, “From Dull to Brilliant: The Aesthetics of Spiritual Power among the Yoruba (1992) in AA, or “What They Came With: Carnival and the Persistence of African Performance Aesthetics in the Diaspora” (2007) by Esiaba Irobi in AP.

12. 同上

13. 同上

14. 同上

15. 同上、まとめ

※ 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

授業におけるディスカッションを充実させるには、そのための準備をきちんと行うことが不可欠である。論文講読で分担された部分を訳し、その内容の要約やコメント／質問等を書いたレジメを準備しディスカッションに臨むこと。分担については授業のなかで学生と教員で決める。

■成績評価の方法・基準

□方法	* クラス・ディスカッションの内容 (レジメと発言)	70%
	** 短評 (article review)	20%
	** 短評についてのプレゼンテーション	10%
	合計	100%

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究所 (博士課程) の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献 (資料) 等

□教科書 *The Anthropology of Art: A Reader* (2002), Howard Morphy and Morgan Perkins eds., Blackwell Publishing.

The Anthropology of Performance: A Reader (2013), Frank J. Korom ed., Wiley-Blackwell.

以上から選出した論文や章を教科書とする。授業計画を参照すること。

なお *The Anthropology of Art: A Reader* は AA、*The Anthropology of Performance* は AP と表記している。

□テキスト なし

□参考文献 *Sociology of the Arts: Exploring Fine and Popular Forms*

(2003, Victoria D. Alexander, Blackwell Publishing).

In Praise of Commercial Culture (1998, Tyler Cowen, Princeton University Press).

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90254	比較民俗学研究B	2単位 後期	1・2	講義	吉川 秀樹 (非)

■テーマ 人類学の視点からの art や performing art の研究

■授業の概要

Anthropology、Art、そしてPerforming Art の特別な関係 Part II

伝統的に非西洋の文化を研究してきた人類学ではあるが、非西洋の「art」や「performing art」は、研究の対象として、また新たな理論、研究方法（研究成果の提示法も含めて）を生み出すインスピレーションとして常に特別な存在であり続けてきた。例えば審美性 (aesthetics)、感情 (emotions)、感受性 (sensitivity)、創造性 (creativity) という異文化／社会研究において方法論上扱いにくい領域に人類学を踏み込ませた。また多くの非西洋文化／社会において精神構造やコスモロジーや社会構造と密接な関係にある art や performing art が、colonization や globalization を通して、西洋の文化／社会に移行することにより、どのように新たな意味や価値等が与えられるか、すなわち異文化／社会間の appropriation の分析に人類学を向かわせた。さらには、人類学における logocentric (文字中心) な研究成果の提示法にも疑問を投げかけ、映像人類学 (visual anthropology) 等の分野の確立へと繋がっていった。そして人類学における art や performing art の研究は、西洋文化／社会の art や performing art の再検証にも影響を与えている。

この授業では、art や performing art を人類学的視点から研究／分析した英語の論文を読み、様々な文化／社会における art や performing art について、そして art や performing art と人類学の関係について考察していく。同時に、大学院レベルで英語の論文を講読するに必要な英語力やスキルを習得していく。

■到達目標

- ・異文化／社会における art や performing art (と分類されるもの) の存在に注目し、その多様性、ならびに共通点や相違点を理解する。
- ・Art や performing art の人類学的研究の視点、理論、方法について学び、art や performing art と人類学の関係について考察する。
- ・研究における英語の論文の講読に必要な英語力やスキルを習得し、向上させる。4) 学生が各自持つ art や performing art に対するアプローチ／専門性の特徴を、人類学のアプローチとの比較を通して、理解する。

■授業計画・方法

授業は、講読する論文についてのクラス・ディスカッションを中心に行われる。学生はディスカッションのための「レジメ」の準備をすること。また各論文を読み始めるにあたり、パワーポイントや資料を使って文化／社会的背景の説明が教員により行われる。

1. 西洋という場所における Non-Western “Art” and “Performing Art”
“Introduction to Art/Artifact: African Art in Anthropology Collections” by Susan Vogel (1988) in AA,
“Oriental Antiquities/Far Eastern Art” by Craig Clunas (1997) in AA, or “What They Came With: Carnival and the Persistence of African Performance Aesthetics in the Diaspora” (2007) by Esiaba Irobi in AP
2. 同上
3. 同上
4. 同上
5. 同上
6. Art と Performing Art と Appropriation そして商品化 (commodification)
“The Collecting and Display of Souvenir Arts: Authenticity and the ‘Strictly Commercial’” by Ruth B. Phillips (1998) in AA or “Representing History: Performing the Columbian Exposition” (2002) by Rosemarie Bank in AP.
7. 同上

8. 同上
 9. 同上
 10. 同上
 11. アート (art) とアーティスト (artist) と人類学 (anthropology) の新しい関係
 “Artists in the Field: Between Art and Anthropology” by Fernando Calzadilla and George E. Marcus in CAA (2006), or “Shadows of Song: Exploring Research and Performance Strategies in Yolngu Women’s Crying-songs” (2002) by Fiona Magowan in AP.
 12. 同上
 13. 同上
 14. 同上
 15. 同上、まとめ
- ※ 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

授業におけるディスカッションを充実させるには、そのための準備をきちんと行うことが不可欠である。論文講読で分担された部分を訳し、その内容の要約やコメント／質問等を書いたレジメを準備しディスカッションに臨むこと。分担については授業のなかで学生と教員で決める。

■成績評価の方法・基準

□方法	*クラス・ディスカッションの内容 (レジメと発言)	70%
	**短評 (article review)	20%
	**短評についてのプレゼンテーション	10%
	合計	100%

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
 芸術文化学研究科 (博士課程) の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献 (資料) 等

□教科書 *The Anthropology of Art: A Reader* (2002) Howard Morphy and Morgan Perkins eds., Blackwell Publishing.
Contemporary Art and Anthropology (2006) Arnd Schneider and Christopher Wright eds., Berg.
The Anthropology of Performance: A Reader (2013), Frank J. Korom ed., Willey-Blackwell.
 以上から選出した論文や章を教科書とする。授業計画を参照すること。なお*The Anthropology of Art: A Reader*はAA、*Contemporary Art and Anthropology*はCAA、*The Anthropology of Performance*はAP と表記している。

□テキスト なし

□参考文献 *Sociology of the Arts: Exploring Fine and Popular Forms*
 (2003, Victoria D. Alexander, Blackwell Publishing).
In Praise of Commercial Culture (1998, Tyler Cowen, Princeton University Press).

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90238	東洋工芸史研究 (奇数年度開講)	4単位 通年	1・2	講義	柳 悦州(客)

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90220	西洋音楽史研究	4単位 通年	1・2	講義	向井 大策

■テーマ 作曲家の個人様式と時代様式の関係について考察する。

■授業の概要

クロード・ドビュッシー（1862～1918）とモーリス・ラヴェル（1875～1937）のピアノ音楽や管弦楽曲、歌曲、室内楽曲などをとりあげ、この両作曲家の個人様式の共通性と違いを、楽曲分析と美学的な背景に関する考察を通して明らかにする。とりわけ、このふたりの作曲家が、文学・絵画などの音楽以外の分野との「照応（コレスポンダンス）」を通じ、どのようにして独自の音楽様式を確立していったかを、「バル・エポック」と呼ばれた、この時代特有の文化的背景を通して考察したい。

■到達目標

- ・和声やテクスチャの面において複雑な面をもつドビュッシーとラヴェルの音楽を分析的な観点から理解する。
- ・ドビュッシーとラヴェルが独自の音楽様式を確立するに至った、文化的・美学的な背景について理解する。
- ・ドビュッシーとラヴェルの個人様式を把握することで、作品研究や演奏解釈の手がかりをつかむ。

■授業計画・方法

講義形式の解説と分析を中心にしつつ、参加者の構成を見ながら、参加者による研究発表・演奏等の機会も交え、両作曲家の音楽への理解を実践的に深めていきたい（したがって、以下の授業計画は、参加者の構成によって変更される可能性もある）。

前期

1. 導入
2. ドビュッシー、ラヴェルとその時代 概説 (1)
3. ドビュッシー、ラヴェルとその時代 概説 (2)
4. ドビュッシーのピアノ音楽の分析 (1)
5. ドビュッシーのピアノ音楽の分析 (2)
6. 参加者の研究発表 (1)
7. 参加者の研究発表 (2)
8. ドビュッシーの管弦楽曲の分析 (1)
9. ドビュッシーの管弦楽曲の分析 (2)
10. 参加者の研究発表 (3)
11. 参加者の研究発表 (4)
12. ラヴェルのピアノ音楽の分析 (1)
13. ラヴェルのピアノ音楽の分析 (2)
14. 参加者の研究発表 (5)
15. 参加者の研究発表 (6) / 前期のまとめ

後期

16. 後期の導入
17. ドビュッシーとラヴェルの歌曲の分析 (1)
18. ドビュッシーとラヴェルの歌曲の分析 (2)
19. 参加者の研究発表 (6)
20. 参加者の研究発表 (7)
21. ドビュッシーとラヴェルの室内楽曲の分析 (1)
22. ドビュッシーとラヴェルの室内楽曲の分析 (2)
23. 参加者の研究発表 (8)
24. 参加者の研究発表 (9)
25. ラヴェルの管弦楽曲の分析 (1)
26. ラヴェルの管弦楽曲の分析 (2)
27. 参加者の研究発表 (10)
28. 参加者の研究発表 (11)
29. ドビュッシーとラヴェルの音楽様式：差異と共通性
30. まとめ。定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・講義や研究発表でとりあげられる作品については、可能な限り、楽譜を準備すること。
- ・それぞれの回でとりあげられる作品については、事前に観賞し、概要を把握しておくこと。
- ・講義でとりあげる内容をより深く理解するために、以下に紹介する参考文献を、授業と平行して読み込んでいくことが望ましい。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点 50%、研究発表 30%、期末レポート（前期・後期各1回ずつ） 20%

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化科学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 教員が配布する。

□テキスト 教員が配布する。

□参考文献 松橋麻利『ドビュッシー』（音楽之友社 作曲家・人と作品シリーズ）

ヴラディミール・ジャンケレヴィッチ『ドビュッシー——生と死の音楽』船山隆、松橋麻利訳（青土社）

アービー・オレンシュタイン『ラヴェル——生涯と作品』井上さつき訳（音楽之友社）

オリヴィエ・メシアン『メシアンによるラヴェル楽曲分析』野平一郎訳（全音楽譜出版社）

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90221	日本音楽史研究	4単位 通年	1・2	講義	高瀬 澄子

■テーマ 日本音楽の歴史的研究

■授業の概要

日本音楽の歴史的研究に関する文献を講読する。講読する文献には、東アジアの周辺地域（中国や琉球）の音楽に関する文献も含まれる。

■到達目標

- ・日本音楽の歴史的研究に関する様々な方法や問題を理解していること。
- ・授業の中から課題を見出し、授業で学んだ方法を用いて自ら研究できるようになること。

■授業計画・方法

令和2年度は、江戸時代の一節切尺八・箏・三味線の独習書として知られる『糸竹初心集』（中村宗三、1664）を取り上げる。

前期

1. 総論
2. 文献の講読 1
3. 文献の講読 2
4. 文献の講読 3
5. 文献の講読 4
6. 文献の講読 5
7. 文献の講読 6
8. 文献の講読 7
9. 文献の講読 8
10. 文献の講読 9
11. 文献の講読 10
12. 口頭発表 1
13. 口頭発表 2
14. 口頭発表 3
15. 総括

後期

1. 前期レポートの講評
2. 文献の講読 1
3. 文献の講読 2
4. 文献の講読 3
5. 文献の講読 4
6. 文献の講読 5
7. 文献の講読 6
8. 文献の講読 7
9. 文献の講読 8
10. 文献の講読 9
11. 文献の講読 10
12. 口頭発表 1
13. 口頭発表 2
14. 口頭発表 3
15. 総括

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・毎回の授業にて、日本史年号の復唱と簡単なくずし字の演習を行うので、予習しておくこと。
- ・古文・漢文の辞書を持参すること（電子辞書でもよい）。
- ・文献はあらかじめ読んでおき、わからない用語や歴史的背景などを調べておくこと。
- ・講読の状況に応じて、授業中に小さな課題を与えることがある。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点（50%）、学期末レポート（50%）。平常点は、授業への参加状況、授業中の課題や口頭発表などを評価する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 適宜プリントを配布する。

□テキスト 適宜プリントを配布する。

□参考文献 浅野健二他監修『日本歌謡研究資料集成 第3巻 糸竹初心集 糸竹大全 糸竹古今集』勉誠社、1978年。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90223	民族音楽学研究	4単位 通年	1・2	講義	小西 潤子

■テーマ グローバル社会における音楽芸能について理解する

■授業の概要

応用音楽学の考え方について学んだうえで、「グローバル化社会における音楽芸能」を大テーマ、「社会」「環境」「学校教育」「地域社会」「文化行政」「国際社会」をトピックスとし、沖縄を含めたアジア太平洋地域の音楽芸能パフォーマンスに関する文献講読および事例研究を行う。これにより、民族音楽学研究の動向を知り、自らが課題を見出して取り組む力を身につける。

■到達目標

- ・民族音楽学研究の動向を知り、自らの研究課題と関連づけて理解する。
- ・民族音楽学に関する英語文献を読む力を向上する。
- ・民族音楽学の課題について、論理的に記述し口頭で的確に説明することができる。

■授業計画・方法

- | | |
|----------------|---------------------|
| 1. 民族音楽学の研究動向① | 16. 音楽芸能と地域社会① |
| 2. 民族音楽学の研究動向② | 17. 音楽芸能と地域社会② |
| 3. 民族音楽学の研究動向③ | 18. 音楽芸能と地域社会③ |
| 4. 民族音楽学の研究動向④ | 19. 音楽芸能と地域社会④ |
| 5. 音楽芸能と社会① | 20. 音楽芸能と地域社会⑤ |
| 6. 音楽芸能と社会② | 21. 音楽芸能と文化行政① |
| 7. 音楽芸能と社会③ | 22. 音楽芸能と文化行政② |
| 8. 音楽芸能と社会④ | 23. 音楽芸能と文化行政③ |
| 9. 音楽芸能と社会⑤ | 24. 国際社会における音楽芸能公演① |
| 10. 音楽芸能と環境① | 25. 国際社会における音楽芸能公演② |
| 11. 音楽芸能と環境② | 26. 国際社会における音楽芸能公演③ |
| 12. 音楽芸能と環境③ | 27. 国際社会における音楽芸能公演④ |
| 13. 学校教育と音楽① | 28. 国際社会における音楽芸能公演⑤ |
| 14. 学校教育と音楽② | 29. 国際社会における音楽芸能公演⑥ |
| 15. 前期総括 | 30. 総括 定期試験は実施しない。 |

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・図書館や音楽資料室所蔵の関連文献、音源・映像資料を利用して、各自授業の予習・復習をすること。
- ・英語文献の講読に際しては、内容理解に必要な予習・復習を徹底すること。
- ・積極的な発言や質問をすること。

■成績評価の方法・基準

□方法 ・授業への取り組み（60%）、期末レポート（40%）

・学習意欲や主体的な取り組みが見られるか。

・理解が深まるとともに、自らの課題を見だし解決する力がついたか。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 教員の指示による。

□テキスト 教員の指示による。

□参考文献 教員の指示による。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90224	琉球音楽論研究	4単位 通年	1・2	講義	遠藤 美奈

■テーマ 琉球古典音楽の理論と研究方法

■授業の概要

前期は、琉球古典音楽の構造理論について、楽譜分析と音響分析の両面から明らかにする。楽譜（工工四）について、書誌的、歴史的、音楽論的な問題を検討することによって、古い伝承を正しく理解し、あるいは現代の演奏を批判的に考察する。後期は、その応用としてこれまでの琉球古典音楽の研究手法を援用して実際に分析等を行い、自らの演奏理論や研究の基礎を身につける。

■到達目標

- ・古典音楽の構造理論と作曲方法を理解すること。
- ・多様な研究手法から適切なアプローチができる方法を選び、分析ができるようになること。

■授業計画・方法

前期

1. ガイダンス
2. 工工四の諸問題
3. 歌三線の音組織
4. 歌三線の旋律形式
5. 《かぎやで風節》の分析
6. 御前風様式の音楽構造
7. 昔節の音楽構造
8. 早間・本間・長間について
9. 本間の楽曲を理解する①
10. 本間の楽曲を理解する②
11. 長間の楽曲を理解する①
12. 長間の楽曲を理解する②
13. 早間の楽曲を理解する
14. アゲとサゲの技法について
15. まとめ（中間）

後期

16. 舞踊作品の音楽
17. 組踊の音楽
18. 八重山の三線音楽
19. 琉球古典音楽研究へのアプローチ 総論
20. 琉球古典音楽研究へのアプローチ 声楽譜とその研究①
21. 琉球古典音楽研究へのアプローチ 声楽譜とその研究②
22. 琉球古典音楽研究へのアプローチ 発声法
23. 琉球古典音楽研究へのアプローチ 伝承論
24. 琉球古典音楽の分析① 楽譜分析
25. 琉球古典音楽の分析② 楽譜分析
26. 分析結果についてまとめ
27. 琉球古典音楽の分析③ 音響分析
28. 琉球古典音楽の分析④ 音響分析
29. 分析結果についてまとめ
30. まとめ

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・楽譜を読み解くために自らの手で様々な形に変換させる。そのため工工四のみならず、五線譜でも適切な表記ができるようにしておくこと。
- ・後期では、授業内で分析を行うが自習課題の確実な実施が肝要である。

■成績評価の方法・基準

□方法 自習課題の確実な実施：20%

前期の簡易レポート：30%

後期終の分析結果のまとめ：50%

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化科学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 金城厚『沖繩音楽の構造-歌詞のリズムと楽式の理論』第一書房

大湾清之『琉球古典音楽の表層』アドバイザー

□テキスト 教員の指示による

□参考文献 教員の指示による

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90225	民族舞踊学研究	4単位 通年	1・2	講義	呉屋 淳子

■**テーマ** パフォーマンス研究を通じて、民族舞踊について理論的、創造的視点から学ぶ。

■授業の概要

本講義では、リチャード・シェクナーの唱える「パフォーマンス」観を通して、「パフォーマンス・アーツ」「日常生活におけるパフォーマンス」「文化的パフォーマンス」について考察し、現代社会における舞台芸術について理解を深める。

■到達目標

- ・文献講読とディスカッションを通して、舞台芸術としての「パフォーマンス」の概念について理解することができる。
- ・現代社会における民族舞踊を取り巻く支配的言説に対して、新たな価値観を発信していくことができる。

■授業計画・方法

〈前期〉

1. ガイダンス、「批判的理論とパフォーマンス」
 2. 「文化的パフォーマンス」(1)
 3. 「文化的パフォーマンス」(2)
 4. 演劇と文化人類学(1)
 5. 演劇と文化人類学(2)
 6. エスノグラフィー(1)
 7. エスノグラフィー(2)
 8. 身体(1)
 9. 身体(2)
 10. ミュージアムと展示(1)
 11. ミュージアムと展示(2)
 12. ジェンダー(1)
 13. ジェンダー(2)
 14. ロール・プレイング(1)
 15. ロール・プレイング(2)
- 定期試験は実施しない。

〈後期〉

1. 「パフォーマンスとアイデンティティ」(1)
 2. 「パフォーマンスとアイデンティティ」(2)
 3. 「パフォーマンス研究」(1)
 4. 「パフォーマンス研究」(2)
 5. 争われる戦争の記憶—「エラノ・ゲイ」「昭和館」と嶋田美子(1)
 6. 争われる戦争の記憶—「エラノ・ゲイ」「昭和館」と嶋田美子(2)
 7. アメリカ「発見」の逆民族誌的パフォーマンス(1)
 8. アメリカ「発見」の逆民族誌的パフォーマンス(2)
 9. オリンピックと開会式と国民国家(1)
 10. オリンピックと開会式と国民国家(2)
 11. 東京の『ミス・サイゴン』—観客の作り方と作られ方(1)
 12. 東京の『ミス・サイゴン』—観客の作り方と作られ方(2)
 13. 介入への実践を目指して
 14. 映像研究(1)
 15. 映像研究(2)
- 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

- ・教科書は必ず購入し、各回の授業終了時に指示するページを十分に読み込んでおくこと。
- ・教科書や参考文献、授業で紹介する文献以外にも、パフォーマンス研究に関する文献を積極的に読むこと。

■成績評価の方法・基準

□**方法** レジюмеおよびレポート(60%)、講義の取り組み方(40%)で総合評価する。

□**基準** 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

芸術文化学研究所(博士課程)の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献(資料)等

□**教科書**(前期) 高橋雄一郎 2011 『パフォーマンス研究のキーワード—批判的カルチュラル・スタディーズ入門』世界思想社

(後期) 高橋雄一郎 2005 『身体化される知—パフォーマンス研究』せりか書房

□**参考文献** リチャード・シェクナー 1998 『パフォーマンス研究：演劇と文化人類学の出会うところ』高橋雄一郎訳、人文書院。

京都造形大学舞台芸術研究センター 2005 『舞台芸術』(8)、月曜社

Victor Turner 2001 The Anthropology of Performance, New York: PAJ Publications.

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90226	民俗芸能論研究	4単位 通年	1・2	講義	久万田 晋

■テーマ

日本・沖縄の民俗芸能研究を学説史的に検討する。

■授業の概要

沖縄の民俗芸能を、民俗文化全体にわたる視野の中で把握するために、日本・沖縄の民俗芸能研究を学説史的に検討する。あわせて県内の祭祀・民俗芸能に関するフィールドワークを行い、人々の生活との関わり、音楽・舞踊・演劇・文学的的局面等、総合的な観点からの理解を目指し、共同研究を行う。

■到達目標

- ・沖縄各地の民俗芸能の様態を、各地の社会状況や近現代史における変遷を含めて把握する。
- ・それと同時に古典芸能、大衆芸能との相互関連性についての理解を得る。

■授業計画・方法

(前期)

- 1～5. 文献購読 基本概念、分類、成立史
- 6～10. 日本本土の民俗芸能の概説 神楽、田楽、風流、その他
- 11～15. 沖縄・奄美の民俗芸能の概説 神祭り、臼太鼓、エイサー、村踊り等

(後期)

- 16～20. 沖縄・奄美の民俗芸能の展開 地域各論
- 21～25. 民俗芸能の現代的展開 イベント・創作芸能、海外への展開
- 26～30. 受講生のレポートに向けての発表と質疑応答

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

- ・沖縄文化や琉球芸能全般に関する基礎知識を持つことが望ましい。

■成績評価の方法・基準

- 方法 日頃の出席状況・授業態度にレポートの採点を加味して評価する。
- 基準 「到達目標」を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究所(博士課程)の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献(資料)等

参考文献

久万田晋『沖縄の民俗芸能論 一神祭り、臼太鼓からエイサーまで』(ボーダーインク、2011年)

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90227	琉球楽劇論研究 (奇数年度開講)	4単位 通年	1・2	講義	鈴木 耕太

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90239	楽曲分析研究	2単位 後期	1・2	講義	近藤 春恵 村田 昌己(非)

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90240	アートマネジメント研究	2単位 通年	1・2	演習	谷本 裕 神谷 武史

本年度休講

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
90241	芸術学研究	2単位 通年	1・2	講義	長嶺 亮子(非)

■テーマ 「芸術」を言葉で記す方法を身につける。

■授業の概要

学術論文を書く上で重要な、先行研究資料の検索と入手の方法、論文中での参考資料の提示方法、論文の構成方法といった基本ルールを学ぶ。また、プレゼンテーションやプログラムノート、作品解説といった、論文とは異なる「文章を簡潔にまとめる」方法を身につける。

■到達目標

- ・論文執筆の基本ルールを理解した文章が書ける。

■授業計画・方法

芸術表現研究領域の学生を対象とする。授業は前期と後期あわせて15回とし、スケジュールおよび内容の詳細と回数は授業初日に受講生と相談した上で計画する。講義のほか、学生による演習を適宜おこなう。

1. 先行研究資料の検索と入手の方法（3回程度）
2. 論文における参考資料・引用の提示方法（3回程度）
3. 論文の構成（3回程度）
4. プレゼンテーション（4回程度）
5. プログラムノートと作品解説の書き方（2回程度）

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

・学内外の学術・芸術機関やインターネットなども利用し、各自の芸術実践に直接関わらないことも含めて多方面に意識を向けておくこと。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点50%、課題20%、期末レポート30%

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書 教科書は指定しない。必要に応じ授業毎にプリントを配付する。以下の文献を講読しておくことが望ましい。

□参考文献 小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術（講談社現代新書）』講談社、2002年。

東京藝術大学大学院音楽研究科リサーチセンター『芸術実践領域（実技系）学位論文作成マニュアル』東京藝術大学大学院音楽研究科リサーチセンター、2013年。

二通信子他『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会、2009年。

令和2年3月発行

2020 授業科目〈シラバス〉

編 集 沖縄県立芸術大学大学院
芸術文化学研究科

所在地 〒903-8602

沖縄県那覇市首里当蔵町1-4

電 話：(098) 882-5058

FAX：(098) 882-5033